

3 吉野川の水利用の現状等

(1) 農業用水

明治以前の水利用

吉野川本川は、沿岸の耕地が比較的高く、直接吉野川からの取水が難しいこと、また常習的な洪水による氾濫、稲作より藍・とうきびの栽培が盛んであったこと等により、直接の水利用はほとんど行われてなく、旧吉野川の下流域でわずかにかんがい用水の利用があった程度でした。

藩政期に吉野川の水を農業用水として利用していたのは、宝暦2年(1752年)に築造された第十堰により流量の確保がされていた旧吉野川最下流の新田地帯(松茂町住吉新田、豊岡新田、豊久新田、豊中新田、小松新田等)くらいでした。

この時期の水利用の方法は、簡単な堰や樋門を築造して、河川の自然流量をそのまま取水する程度のものでした。

本川からの農業用水の本格的な取水はまだ先のことになります。

江戸時代中期以降に開発された吉野川河口域の新田村落一覧

新田名	明治22年の村名	初期開発者	開発開始年	明治初年税地面積(町歩)	村高(石)
住吉新田	板野郡松茂村	伊澤亀三郎他	天明3年 1783	37.0	185
米津新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	天明4年 1784	27.6	66
松岡新田	板野郡川内村	寒川道之丈	寛政年間 1789	8.5	33
富吉新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	寛政4年 1792	28.4	54
富久新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	寛政4年 1792	25.5	
長江新田	板野郡大津村	阿部政治郎	寛政8年 1796	24.2	100
豊岡新田	板野郡松茂村	坂東茂兵衛	享和元年 1801	57.9	169
豊中新田	板野郡松茂村	豊成金兵衛	享和元年 1801	11.7	44
満穂新田	板野郡松茂村	後藤善右衛門	文化12年 1815	48.3	101
豊久新田	板野郡松茂村	阿部豊吉	文化14年 1817	52.0	135
小松新田	板野郡川内村	荒井幸次郎	文政年間 1818	82.0	200
金岡新田	板野郡川内村	後藤喜右衛門	天保2年 1831	6.9	19
未広新田	名東郡沖洲村	森 晋平・ 弥左衛門	天保10年 1839		
万代新田	名東郡斎津村	小倉屋芝家	弘化3年 1846	4.7	
金沢新田	板野郡川内村 他	土成村日根氏	安政2年 1855	14.1	

1. 『辰巳新田の開発 - 井上家文書を中心に - 』(徳島県立文書館、1993年)より、修正・加筆のうえ転載。

2. 原資料は、『角川日本地名大辞典』により作成。

3. 村高は、『旧高旧領取調帳』の数値による。

4. 明治初年税地面積は、田・畑に宅地を加えた面積。

明治以降の水利用

明治中頃からの藍作の衰退（明治30年代のドイツからの化学染料の大量輸入による）と共に、徳島平野を中心とする吉野川沿岸耕地は、次第に米作に転換し、農業生産の安定化のために、吉野川本川からの水利用の早期実現を切に願うようになりました。

明治35年（1902年）に名西郡長の井内恭太郎氏が吉野川右岸を潤す麻名用水と吉野川左岸を潤す板名用水を計画し、11年の歳月を要し、明治45年（1912年）には麻名用水が、大正元年（1912年）には柿原堰の堰上げにより取水する板名用水が完成し、本川から自然取水する大規模なかんがい用水利用がようやく始まりしました。

昭和にはいると、吉野川から水を引く計画は積極的に事業化されました。

板野郡では吉野川普通水利組合が昭和11年に今切川潮止水門、昭和24年に旧吉野川潮止水門をそれぞれ完成し、大正12年に完成していた第十樋門により洪水被害も軽減され、周辺地区への安定的な農業用水が確保されました。

阿波郡では、昭和30年に阿波用水が完成しました。

上流部では、三好郡の北岸が最も早く、昼間足代用水が昭和28年に完成し、昭和37年に美馬南岸用水、三好南岸用水と相次いで完成しました。

しかしながら、吉野川沿岸の耕地（約15,000ha）は吉野川の水面よりも高く、自然取水が困難なうえに土地の大部分が古くから藍、さとうきび、桑などの畑地として利用され、あまり多くの農業用水を必要としなかったことから、本川を水源としている耕地は約半分の約7,300haに過ぎず、その他は支川、地下水、ため池などに水源を求めていました。

吉野川本川からの取水の実施

昭和28年 昼間足代用水

昭和37年 三好南岸用水

昭和37年 美馬南岸用水

昭和30年 阿波用水

明治45年 麻名用水

大正元年 板名用水

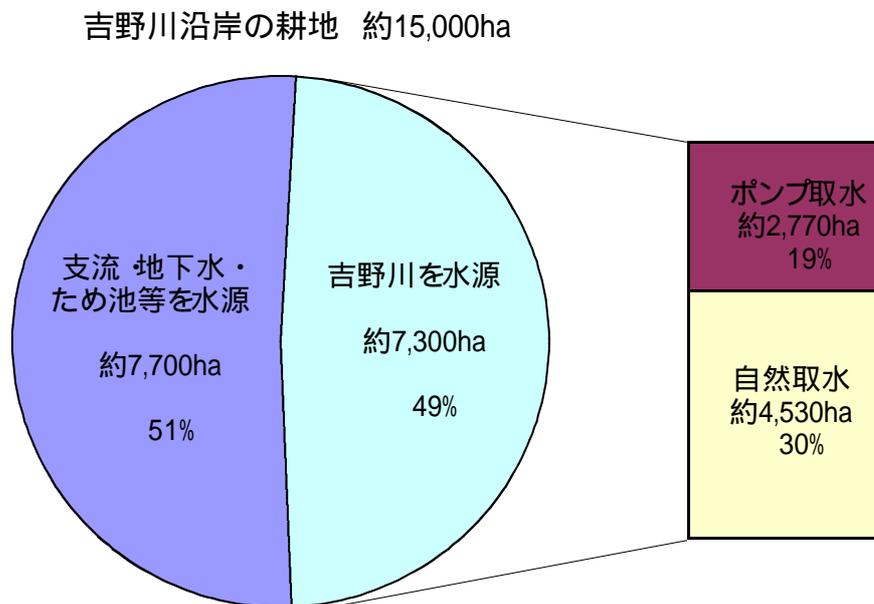
昭和11年 今切川潮止水門

昭和24年 旧吉野川潮止水門



吉野川本川からの自然取水は、吉野川右岸の麻名用水と左岸の柿原堰掛かりの板名用水約 2,530ha並びに旧吉野川・今切川河流地区約 2,000haが行っていました。

吉野川本川からの取水をポンプ取水に頼っていた北岸地域の取水は、吉野川本川の流況に大きく左右されており、新しくその水源を本川に求めている他の地区と共に、本川からの安定した取水を望んでいました。



昭和40年頃における吉野川本川からの取水実態

これらの不便な状況は、吉野川左岸の池田町から板野町までの12町にわたる6,860haにかんがい用水を供給する吉野川北岸農業用水の平成元年の完成により、吉野川沿岸耕地全体の約75%が自然取水となり、水利費の削減と用水の安定供給が図られています。